

GCL NEWSLETTER 第 50 号 (2017.12)



◆ プレゼンコンペ受賞者の声

最優秀賞・繁田亮さん 優秀賞・野寄修平さん

◆ ATR オープンハウスイベント

◆ 海外インターンシップ滞在記

イギリス編 稲吉玲美さん (博士課程 2 年)

■ GCL プレゼンコンペ授賞式

2017年7月に開かれたGCLプレゼンコンペ受賞者への授賞式がGCLラボで行われ、最優秀賞を授賞した繁田亮さん(D3)と、優秀賞を授賞した野寄修平さん(M2)に國吉教授から表彰状を授与されました。本記事では、受賞者のお二人と授賞式に参加された先生方の授賞式後の座談会の様子をお伝えします。



司会：受賞の感想を一言ずつお願いします。

繁田さん：今回は2回目の授賞です。(博士課程からの編入のため)3年間しかGCLにいない中で2回も賞をいただいたということは非常に光栄だと思います。

司会：プレゼンの際気をつけた事はありますか。

繁田さん：昨年までの発表と異なる点は演出として動画も活用したことです。これまでに撮りためている研究関連の動画や写真などの素材をなるべく使おうと意識しました。その方が現場感や臨場感が出るかなと。

司会：ありがとうございます。野寄さんはいかがですか。

野寄さん：今回が初めてのプレゼンコンペでした。「ものづくりと看護」というコンセプトだけで押し切った感じもあるので、今後はコンセプトだけでなく成果も評価していただけるように努力したいと思います。

司会：プレゼンで心がけた点はありますか。

野寄さん：特に社会課題と研究がどう繋がっているかというところを強調しました。

國吉先生：そこはGCL的には王道ですね。つまり、分野の違う人に向けて細かい研究やテクニックの話はあまり意味がなくて、それよりは一体それはどういう意味で、社会へど



ういうインパクト与えるのかという事の方をしっかり伝えることがGCL的には王道で、正しい姿だと思います。

繁田さん：学生によっては自分の研究はあまり社会と関係ないと諦めてしまっていて勿体無いと感じることもあります。

田中先生：過去の受賞者では、そのような状況でもいかに自分の研究が社会的課題解決に貢献するかに関する説明を工夫して受賞している人もいますので、ぜひ諦めないで欲しいと思います。プレゼンコンペは良いチャンスで、それぞれベンチャーキャピタルに対してピッチでプレゼンするようになつて臨んでもらえると嬉しいなと思います。

國吉先生：同じ意見です。プレゼンは、本人が諦めていたら絶対分かってしまいますよね。裏返せば、絶対にこれを相手に通じさせようと強い思いがあれば、やはりそれも伝わるんですよ。準備にも表れてくるし、中身にも。田中先生がおっしゃったように、ほぼ純粋数学の研究について、社会的な効果や研究の意義を一般の人にも分かるように説明を工夫した素晴らしい前例があります。そのようにいかに伝えることに努力できるかも大切です。もちろん研究そのものも立派である必要がありますが、研究の種類は様々なわけですね。非常に理論的なものから実践的なものも、融合的なもの、特定のテーマを掘りさげるものなど。どれであってもいいのですが、努力して成果が出てくるような研究とは、何らかの意味で社会的にインパクトは必ずあり、



それを自分がいかに理解できるかということがポイントだと思います。

プレゼンコンペ全体の感想としては、GCL始まって以来プレゼンコンペを見てきていますが、初期の頃と比べ、非常に良いプレゼンが出て来るようになってきていますよね。そういう意味ではGCL自体が発展してきているなど感じます。それは受賞者の努力が大きいにしてもそれだけではなく、GCLの環境を構成しているみなさん、学生、先生方の総合的な力が表れてきているとも感じます。

司会：来年のプレゼンに向けてのアドバイスはありますか。

田中先生：文系、社会科学よりの研究の場合は、どのようなICTをどのように活用するのかという点をもっと分かりやすく伝えられるといいと思います。それは、いわゆる文系、社会科学系の人たちがいつも悩んでいることでもあります。その点に評価の一定のウエイトがかかっているのも実態だからです。その点は、GCLに限らず競争的資金を獲得する際にも大事になると思います。課題をきちっと説明するのは社会科学とか文系の学生はわりとできますが、具体的にどうするのかという説明もやはり求められます。

國吉先生：自分がやりたいことについて技術的な点もちょっと踏み込んで、しっかり説明できるとなるとものすごくインパクトがあります。聞く側としては、なるほどと思います。

田中先生：理系の人たちが社会科学的課題について一生懸命考えると同時に、文系の方は技術についても言えるようになるといいと思います。これはなかなか厳しいことだというのは百も承知ですが。

國吉先生：GCLのコンセプトは、文系理系の両者をよく理解してものが言えるようになることがコンセプトですので、そこはやはり努力してほしいし、さらに互いに学び合

う事ができるようになると良いかと思います。

谷川先生：そもそもあまり自分の研究分野に興味がない人に対して、ちゃんといかに惹きつけて説明をして伝えるかというところまで踏み込んでいるプレゼンはなかなかないという印象もありました。

國吉先生：それは重要ですね。研究資金の獲得でも、あるいはベンチャーキャピタルを獲得にしても、訴えかける相手は別に自分の仕事に興味が最初からあるわけではないし、お金出したいと最初から思っているわけではないので、そういう人たちに対していかに訴求するのかを考える必要がありますね。評価する側は、はっきりいって専門外の人ばかりですよ。例えば研究資金の場合は確かに専門の人も審査を行います。しかも多様な人がいて、それぞれ知識も専門も経験も異なる、そのような人たちに、いかに自分のコンセプトや具体的な見通しをイメージしてもらえるか。それができるかできないかで大きく人生や仕事の未来も変わる可能性があります。

司会：なるほど。学生のうちからプレゼンコンペのような機会があり成長できることは、非常に恵まれていているのですね。

國吉先生：みなさんがそう捉えて挑戦し続けてくれると嬉しいですね。

田中先生：今回参加者からのコメントを見ていて印象的だったのは、様々な研究が分かりやすく説明されていて、異なる分野でも非常に勉強、参考になったというものです。自身の研究の幅を広げたり、他の学生の研究の理解を深めるような機会としてプレゼンコンペを捉えて少しでも多くの人の発表を見てもらえると嬉しいなと思います。

(聞き手：渋谷遊野)

■ 寄稿 プレゼンコンペ最優秀賞・繁田亮さん



情報理工学系研究会電子情報学専攻 D3 の繁田亮です。2017 年度の GCL プレゼンコンペで 2015 年度に続き、再び最優秀賞という栄誉をいただきました。昨年度は準備不足で自己評価としても冴えないプレゼンになってしまっていた反省を踏まえて、今年は GCL 生として過ごす最終年度ということもありますし、改めて構成など見直したことが奏功したかと思っています。私は D1 からの編入なのでプレゼンコンペは 3 回目ですが、その中で 2 勝という結果は自信につながっています。

プレゼンの概要

コスト効率のよい土壌モニタリングシステムの開発

私の研究は Internet of Things (IoT) を中心とした ICT 技術を活用してデータに基づいたスマート農業の実現を目指しています。特に土壌の水管理は品質や生産効率を大きく左右するので、土壌水分センサを利用して、水分量を監視することで、最適な灌水量・タイミングを見積もることが期待されています。

しかし、これまでの土壌センサは研究用途のものが多く、高精度であるものの、高価で、農家に手の届くものではありませんでした。そこで、この私は印刷技術を活用した回路実装技術や環境発電などを活用して、低価格化を実現し、一般農業用に広く展開できる土壌センサの開発を行っています(図 1)。開発したセンサ(図 2 左)では 20cm, 10cm の土壌水分と地表

面温度が収集でき、無線でクラウドにデータをアップロードします。アップロードされたデータはクラウド上の Web アプリ(図 2 右)で可視化・分析が可能になっています。

農業用センサは様々な環境で使われることが想定されるので、実用的なシステムを完成させるためには、

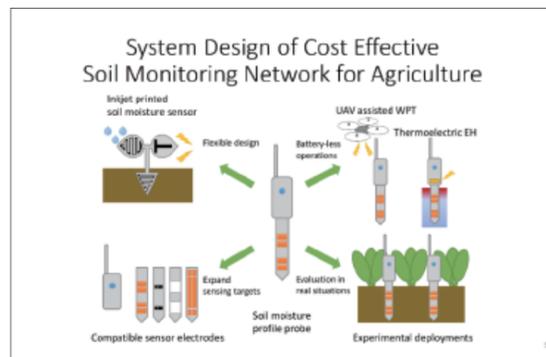


図 1

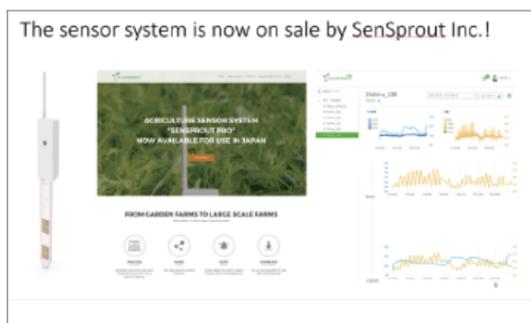


図 2

多様な圃場での実証実験が欠かせません。全国各地で累計数百個のセンサを展開している他、海外でもインドを中心に展開を始め、そこで得られた知見をもとに改善を続けています。

GCL の活動としても、印刷技術でのセンサ実装を応用して、インクジェットプリンタで園芸用の簡易土壌センサを自由に作成してもらってワークショップを行っている他、自主企画プロジェクトとして、ICT を活用した自動化・省力化を徹底した簡易植物工場を空き家内に構築することで、空き家の有効活用や地産地消の促進に役立てる「空き家 + Agriculture = Akiyagri」プロジェクトを提案し(図 3)、電子情報学・農学国際の GCL 生からなるチームで取り組んでいます。

GCL project: Akiya+Agriculture = "Akiyagri"
Collaborative project with agricultural science and ICT



Vacant houses

Rapid increase of vacant house

+



Plant factory

Too expensive initial cost

- Implementing automated plant factory for vacant house
- Designing marketing strategy for selling the harvested crops
- Encourage effective utilization of vacant spaces

図 3

プレゼンの工夫

前回の受賞した際には、発表の際、とにかく大きな声で話すことという端的なアドバイスをした覚えがありますが(笑)、今回は私が普段心掛けていることをご紹介します。具体的には内容の優先順位を徹底して整理する、聞き手の立場で見直すといったことです。

まず優先順位ですが、ある程度自分で整理できているつもりでも、例えば 10 分のプレゼンを用意していたとして、時間がないので 3 分または 1 分で話してくださいと言われて、とっさにまとめられなければ、曖昧な部分が残っているということです。自分の発表内容で一番話すべき内容がわかっていれば、いきなり短く話せと言われても対処できるはずですが、逆に 1 分で話すなら、どう話すかと考えてみて、残ったものが一番大事なものです。1 分→3 分→5 分と想定発表時間を徐々に伸ばしていくとそこで重要な順で情報がプラスされていくはずですから、優先順位がはっきりして長いプレゼンでも強調すべきポイントがわかっ

てメリハリのある話し方ができるようになります。

次に聞き手の立場になるということですが、この際最悪の聞き手を想定してみるといいです。例えば、自分の分野に関する知識は何もなくて、とても眠く、注意散漫な人が聞いていると考えてみましょう。そういう人はちゃんと全部話を聞いてくれるとは思えないので、大事なことは繰り返し言う・視覚的に表現する必要がありますし、前提知識の説明を飛ばせば理解してもらえません。そういう人でも理解してくれそうな構成になっていれば、誰にとっても聞きやすいプレゼンになります。

他にもいろいろノウハウはありますが、プレゼンテクニックの書籍はたくさんありますので、それらをあさってみるといいかと思います。おすすめは西脇哲著「プレゼンは「目線」で決まる」です。マイクロソフト在職時代に著者ご本人から社内向けのプレゼン講座も受けたことがあるのですが、とても勉強になりました。

副賞の活用

今回も研究費をいただけることになりましたので、早速 11 月 6 日～8 日にかけてオランダ デルフトにて行われた ACM SenSys 2017 を聴講させていただきました。やはり、最先端の研究をまとめて聞ける機会が得られると、新しい研究へのインスピレーションが得られます。まだ、残り分がありますが、実証実験などで出張機会が多いので、主に研究活動の出張費にあてさせていただこうかと考えています。

■ 寄稿 プレゼンコンペ優秀賞・野寄修平さん



受賞の感想

健康科学・看護学専攻 M2 の野寄修平です。この度はプレゼンコンペで優秀賞という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。開発の途中段階での発表でしたので、賞をいただけるとは思ってもよらず、とても嬉しいです。今回のプレゼンだけでなく、研究成果も評価していただけるよう、次の目標として、まずは修士論文の執筆・発表へ向けて引き続き努力します。

プレゼンの概要

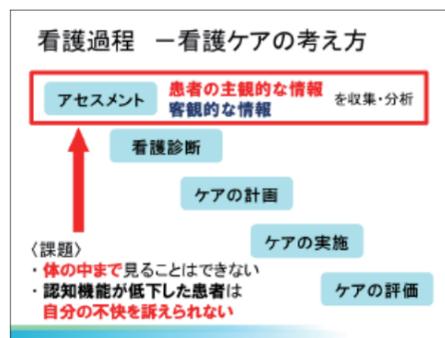
プレゼンは、研究分野の紹介から入り、研究の大きなバックグラウンド、研究の進捗、解決したい社会課題、という形で進めました。

私は 2012 年に理科 1 類に入学したのち、医学部健康総合科学科に進学し、現在は健康科学・看護学専攻の老年看護学／創傷看護学分野という研究室に所属しています。私はここで、看護理工学という、看護学と生物学、工学の融合分野を学んでいます。看護理工学は看護の臨床現場の問題やニーズをもとに、生物学を応用したメカニズムの解明、工学的手法によるプロダクト開発、そして臨床現場での評価までを一貫して行ないます。中でも私の研究テーマは工学寄り、認知機能の低下した高齢者において不快を察知し、個別的な看護ケアを提供するためのセンシング技術の開発を目標としています。

ところで、看護は看護過程という考えに基づいて看護のケアを提供します。看護過程は、患者の状態の

研究分野 ー看護理工学

- ・看護学と分子生物学、工学の融合分野
 - 自分の研究は工学寄り
 - 要素技術を組み合わせたシステム開発、臨床への実装が主
 - ニーズベースで研究を進める



アセスメント、看護診断、ケアの計画立案、実施、評価という 5 つのステップからなります。患者本人の訴え（主観的情報）や観察（客観的情報）に基づいて患者の状態を評価して、そこから必要なケアの計画を立案して実施し、ケアの効果を評価するという流れを、PDCA サイクルのように繰り返すことで患者の状態にあったケアを実施します。私の現在の研究テーマである、不快のセンシング技術の開発は、この 5 つのステップの中でも特にアセスメン

トを対象にしています。

不快を感じているということを知覚するだけでなく、その不快の原因までをケア提供者が知ることができれば、その原因を除くケアを提供することが可能となり、ケアの質の向上、ひいてはケアを受ける方のクオリティ・オブ・ライフ（QOL、生活の質）の向上につながります。不快、といってもあまりに広いので、QOL に大きな影響を与える高齢者の排泄に関わる問題の解決が、現在の研究の目標です。

排泄に関わる問題とそのケアは、近年その重要性が再認識されています。平成 28 年度診療報酬改定では、「排尿自立指導料」という、病院で排尿管理の専門知識を持った排尿ケアチームを作り、排尿の自立に向けたケアを実施すると、診療報酬を算定できる仕組みが新たに作られました。この仕組みが作られる背景には超音波検査技術（エコー検査）の普及があり、まさに技術が社会を変えようという一例ではないでしょうか。

また、最近では、Triple W というベンチャー企業が排泄のタイミングを予測するデバイス DFree を開発し、介護施設で実証実験を実施しているそうです（ぜひ、コンセプト動画をご覧ください）。

取り組む社会課題 ー排泄の自立

- ・平成28年度診療報酬改定における「排尿自立指導料」の算定開始
 - 尿道留置カテーテルを使用している患者を対象に、自分で排尿できるような多職種チームで支援（医師、看護師、理学療法士、作業療法士）
- ・患者の尿意・尿量に基づいて個別的な対応を行なう必要性
 - 非侵襲、無拘束で尿意・尿量を計測・推定

プレゼンの工夫

他分野の人にいかにかわりやすく伝えるか、という点を意識してつくりました。聴衆のほとんどは看護系以外の学生なので、看護の基本的な考え方（看護過程）を提示して、そのうちのどこにアプローチしているのかを示しています。

また、自分の研究が、自分の専門分野の視点、ICT の活用の視点でそれぞれどう面白いのかを話すことも、自分の研究の GCL らしさを出すという点で重要だと考えています。それぞれを「臨床的課題」、「技術的課題」として提示したのですが、プレゼン当日はま

さにこの部分で先生からアドバイスをいただきました。様々な分野の先生方から助言をいただけるという点でもプレゼンコンペは貴重な機会だと思うので、研究のどこで詰まっているのかを話しても良いかもしれません。

これはまだ自分がチャレンジしている段階の話ですが、前述の排泄予知デバイス DFree のコンセプト動画のように、ある問題があって、それを解決する技術を開発して、それがどのように社会を変えるか、というところまでのビジョンを語れるようになると、周りの人を巻き込んで、研究をより前進させられるのではないかと思います。動画といえば、東大看護の PV に出演したので、ぜひこちらをご覧ください（「東大ゾンビ」で検索してみてください）。

副賞の活用

今回いただいた研究費は、現在開発中のシステムの臨床現場におけるフィージビリティスタディの費用として活用いたします。もちろん安全には十分配慮の上ですが、最新の研究成果を臨床で試用して評価・改善できることも、看護の分野で工学的な研究をすることの醍醐味の 1 つだと考えています。

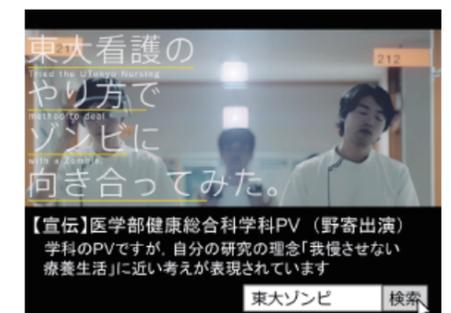
<参考>

YouTube「もうトイレに焦らない！ 排泄予知ウェアラブル DFree」

https://www.youtube.com/watch?v=-1UY-puoH_M

YouTube「東大ゾンビ ー東大看護のやり方でゾンビに向き合ってみた」

<https://www.youtube.com/watch?v=YUSIKIm2Vz4>



■ ATR オープンハウスイベント

昨年度 GCL をご勇退された浅見 徹先生が代表取締役社長としてお勤めになる ATR（株式会社国際電気通信基礎技術研究所）のオープンハウスイベント 2017 に伺いました。

2017 年 10 月 26 日、27 日に行われた ATR オープンハウスイベント 2017 では、「OPEN ATR, OPEN KEIHANNA」をテーマに、脳情報科学、ライフ・サポートロボット、無線通信、生命科学、農に関する最先端の研究開発成果等について、講演、デモンストレーション、パネル展示が行われました。まず浅見先生より伺った ATR の理念や今後の展開をご紹介し、次のページでは発表されていた研究内容について紹介します。



ATR の理念

ATR の理念は、「人を学ぶ」、「人に学ぶ」、「地球人の私」という 3 つの言葉に表されます。「人を学ぶ」というのは、個人あるいは集団としての人間について勉強・研究しようという意味です。「人に学ぶ」というのは、得た知見を装置とかシステムにして社会還元するという意味です。そして、「地球人の私」というのは、世界中からいろいろな人たちが ATR に留学するつもりで来てくださいという意味です。これらの理念は GCL にも重なるところがあると思います。

ATR の現在の研究

ATR では、脳情報科学、生活支援ロボット、無線通信、生命科学という 4 分野における研究をしています。ATR の強味は、脳情報科学、生活支援ロボット、無線通信、生命科学といった ICT 技術を使って社会に貢献することです。

その目的は、基本的には日本国憲法 25 条に記されている「健康で文化的な最低限度の生活を国民に保障する」ということで、その最低限度の水準を上げる努力をしています。

ATR の今後について

ATR のこれからの研究課題は、障害者、高齢者、精神疾患患者などの人々の現在の最低生活保障レベルを上げることが目的として、どのような研究をするのかを考えることです。

そして、イノベーション創出に向けて、「人を学ぶ」、「人に学ぶ」という ATR の本質に立ち返ることが必要だと思っています。現在の ATR は R&D ではなく、事業部門をつくり、イノベーションを起こすことができる段階になりました。今後、よりサステナブルな研究ができる環境づくりを行っていく予定です。

研究紹介

・ポスターセッション

ポスターセッションでは多分野にわたる研究紹介が行われていました。中でも fMRI と深層学習を用いて可視化する脳情報デコーディング技術についてポスター紹介では、眠っているときにみる夢の可視化についての研究が紹介されていました。事前に多くの画像を被験者に提示し、その際の脳活動を記録して機械学習の教師データとすることで、脳活動から被験者が想像した画像を再現することができる技術を応用されたとのことでした。

・アンドロイド

アンドロイド「オシャレ上級者エリカの部屋」では、最新アンドロイド「ERICA」とファッションに関する対話を行うことができるデモンストレーションが行われていました。現時点では限定されたシチュエーションで簡単な会話ができる水準でしたが、将来的には深層学習などを用いることによって、人によって遠隔操作されている状態と区別がつかないレベルの対話を行うことを目指しているとのことでした。

・テレノイドケア

赤ちゃん型遠隔操作ロボット「テレノイド」を高齢者介護施設に導入することで、普段人と接することが少なくなってしまう高齢者のコミュニケーションを活性化しようという取り組みが紹介されていました。テレノイドは手の部分が動いてハグをすることができ、身体接触が少なくなりがちな高齢者の方々に癒やしを与えることができると紹介されていました。

・トレファーム

東レ建設株式会社が ATR 敷地内に開設している「トレファームラボ」では高床式砂栽培農業施設を活用した農業シェアリングモデルの実証事業が行われていました。腰を屈めなくても農作業ができる高床式砂栽培農業施設を活かし、栽培に関わる工程を分割化した上で、IoT を活用し地域住民の方々と葉物野菜の栽培が行われています。ATR の敷地内にある施設では葉物野菜が栽培されており、一定間隔でセンサとカメラが配置され自動的に散水が行われていました。

(文責・写真：荒川清晟、松本啓吾)

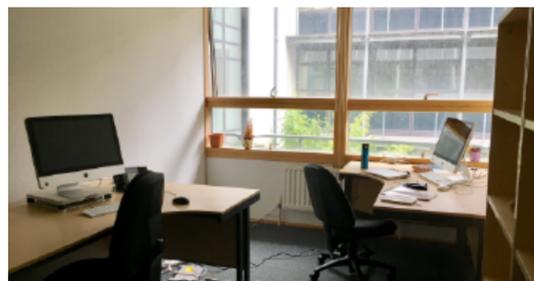


■ GCL 海外インターンシップ滞在記 稲吉玲美さん (D2)

GCL 生は国内外において 6 ヶ月間のインターンシップを行うことができる貴重な機会を与えられています。今回は博士課程 2 年の稲吉玲美さんに、インターンシップの計画から実行までについて寄稿して頂きました。



大学のメイン・ビルディング



Visiting academics 用の研究室

ー 自己紹介をお願いします。

教育学研究科臨床心理学コース博士 2 年の稲吉玲美です。女性特有のメンタルヘルスの問題に関して興味があり、現在は月経に伴う諸症状について研究しています。

ー インターンシップはどちらに行かれましたか？

私は 2017 年 9 月末～ 11 月末の約 2 ヶ月間、イギリス、ウェールズ地方のバンガー大学にある Centre for Mindfulness Research and Practice という所にインターンをしていました。D2 の秋という GCL が定める期限ギリギリの実施となり、事務局の皆さまをはじめ多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいましたが、非常に貴重な体験をさせていただきました。

ー 具体的な動きがあった時から訪問まで、どのくらいの期間が必要でしたか？

最初は、知人を通じて見つけた別の機関に、D2 の春からお世話になる予定で準備を進めていました。しかし、突然先方よりお断りの連絡を受け、年末になって計画が白紙になりました。困り果てて指導教員に相談したところ、お知り合いの方に掛け合ってください、その方が今回の滞在先のセンター長を紹介して

くださいました。自分のこれまでの研究の概要と関心事についてまとめた資料をメールでお送りすると、「今のあなたにはこういうことが必要だと思うから、10-11 月に開催されるこのセミナーに参加しなさい」といった指導をいきなり返信でいただき、トントン拍子で滞在が決定しました。

ー 現地での研究の様子について教えてください。

とはいえ、週に 1 回 3 時間のセミナーに参加する以外には何もすることが決定しないまま現地入りしたので、まずは「自分がここで何を学べるか」を探り、活動計画を立てる必要がありました。そこで重要となったのが、自分の考えと疑問を常に明確にしておくことでした。具体的な工夫については後述しますが、うまく自分の意図を伝えられることで、必要な情報が載っている書籍や論文を紹介してもらえました。滞在前半は、次回のミーティングまでに資料を読み、考えたことや疑問を伝え、新たな課題を出してもらおう、という流れで活動を進めました。

また、私の関心とよく似た研究をされている方と知り合うことができ、今後も博士論文についてアドバイスをいただけることになりました。その他、現地の研究者に積極的にアポイントメントを取り、さまざまな観点からの研究についてお話をうかがうことで、視野が広がったような気がします。

滞後半には、センターが主催するカンファレンスやワークショップに参加しました。ロンドンまで遠征する必要があるものもあり、費用も結構かかったので、後述のように宿泊費用をかなり抑えておいて正解でした。

ー 現地での衣食住について教えてください。

衣ー 11 月のイギリスはかなり寒く、東京の冬の装いが必要です。天候が変わりやすく風が強いことも多いので、傘よりも防水の上着が便利です。夏は 21 時頃まで明るいらしいのですが、11 月は 16 時には真っ暗で、人によっては鬱っぽくなってしまうとも聞きました。夏に来るべきです。

食ーイギリスは「ご飯が不味い」「物価が高い」といったイメージがあるかもしれませんが。確かに食事は小麦とポテトが多いですが、不味いと感じたことはありませんでした。ベジタリアン用のメニューが豊富ですし、果物は寧ろ東京よりもお手頃なので、気をつけていれば栄養が偏ることもありません。私は気をつけなかったのが 2 回りくらい太りました。

住ー上述の通り、現地に赴くまで具体的な活動計画が何も決まっていなかったので、面白そうなどがあればお金を払ってでも取り組みたいという気持ちがありました。そこで、宿泊費をできる限り抑えるため、滞在期間の後半はネットで見つけたお宅にお邪魔しました。前半はどうしても見つからなかったため、センターの事務の方に相談し、特別に学生寮を借りさせてもらいました。結果的に、学生寮では友達ができ、後半はウェルシュの生活を送ることができ、体験の幅が広がりました。

基本的に東京の生活と変わりませんが、一番気になったことが水質でした。イギリス南部、ロンドン周辺は硬水です。ウェールズは日本と同じ軟水ですが、それでも髪はパサパサになり肌も荒れました。いつも以上に保湿に気をつけ、ソープ類も日本のものは泡立ちが悪くカスになりやすいので、現地調達が良いです。

ー 最もインパクトがあった思い出について教えてください。

一番衝撃的だったのは、雹が降った日に水道管が



ロンドンでのワークショップ



大学近くのショッピング街

凍結してお湯が出なくなったことに気づかず、頭から思い切り冷水をひっかぶって危うく風邪を引きかけたことです。イギリスで冬にお湯が止まることはよくあるそうなのですが…。

冗談はさておき、今回の滞在で最も刺激を受けたことは、センター長をはじめ意欲的に研究をされている女性の方々の自由でオープンな姿でした。自身の研究やそこに込めた思いを語ってくださる姿はとても魅力的でした。また、私のような素性の知れない外国人を無償で受け入れ、忙しい時間を割き、私にとってベストなことを考えてくれる。寧ろそれを楽しんでいるようにも見えました。自分が研究者として将来どうありたいか、その姿勢について、改めて考えさせられました。

ー 最後に現在インターンを計画している学生へ、アドバイスをお願いします。

これまで自分の活動や体験について、みなさんの役に立ちそうな部分を具体的に書いてきたつもりです

が、少しでも参考になれば嬉しいです。

最後にコミュニケーションについてですが、私は英語が得意ではないので相当工夫と努力をする必要がありました。特に苦手なリスニングとスピーキングをカバーするために、会話は可能な限り録音して復習し、ミーティングにはレジュメを持参し、訪問先には前もって質問内容をメールしておきました。こちらが主体的にアクションを起こす事で、相手も意図を汲みとってくれ、あまり研究活動の中でコミュニケーションの問題を強く感じることはありませんでした。ただ、どうしても日常会話はぎこちなくなり、残念な思いも沢山したので、まだインターンまで時間がある方はぜひ今のうちから準備をしておくと思います。

また、日常と異なる環境に身を置くことは大変であると同時に楽しいこともたくさんあるはずなので、ぜひ週末は羽を伸ばして、観光やその土地の文化を楽しんでくださいね。



観光もたくさんしました
カーネーション城



ロンドンの帰りにオックスフォードに寄りました
ハリーポッターで有名なクライスト・チャーチの食堂



リバプールなど近場の主要都市にも日帰りで行ってみました

編集・発行：情報理工学系研究科・GCL 広報企画

渋谷遊野 (学際情報学府 D2), 赤池美紀 (学際情報学府 D1), 増田理恵 (公共健康医学 D1),
山田文香 (情報理工 D1), 荒川清晟 (学際情報学府 M2), 小川浩寿 (農学国際 M2), 松本 啓吾 (情報理工 M2),

発行責任者：谷川智洋 (特任准教授)

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 621 号室 GCL 事務局

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp